伊波普猷全集 全10巻

監修 服部四郎 仲宗根政善 外間守善

百科事典の
平凡社

沖縄文化論叢 全5巻

●各2、500円

編＝大藤時彦 小川徹 新里恵二 外間守善 馬 東一

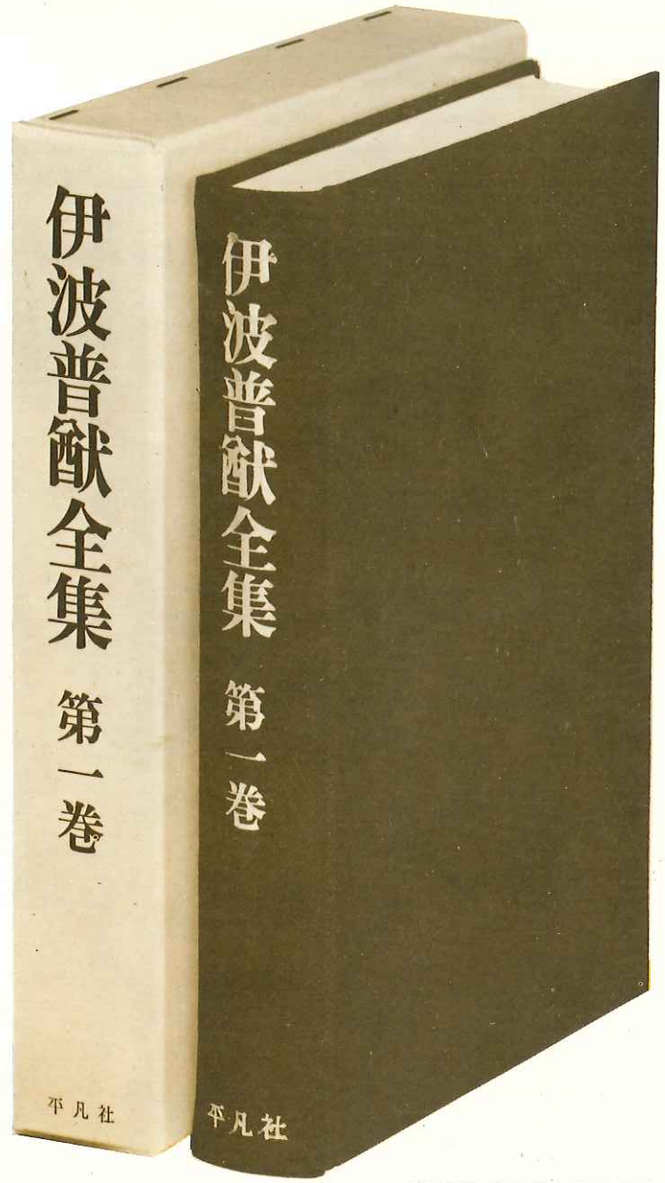
沖縄の社会と宗教

編＝東京都立大学南西諸島研究委員会 ●1、600円

第1回配本＝4月 第1巻■定価3、400円

1 古琉球 古琉球の政治 歴史論考

●第2巻以降巻数順に隔月刊・予価3、400円
●A5判・各巻平均500頁・9ポ1段組
●上製本・布装・箱入り



平凡社

〒102 東京都千代田区四番町4・振替東京29639

●予約申込書

伊波普猷全集全10巻を予約します

ご住所

お名前

●取扱書店

刊行のことば

沖縄や沖縄学について語ろうとするとき、あるいは沖縄を通じて日本の根源を知ろうとするとき、柳田国男・折口信夫とともに伊波普猷の業績は、素通りすることのできない偉大な指標である。

伊波普猷は、明治九年沖縄県那覇市に生まれ、第三高等学校を経て東京帝国大学に学び、明治三十九年に帰郷した。帰郷後の伊波は沖縄研究の必要性を痛感し、文献資料と民俗資料の収集と研究に全精力を傾けた。この伊波の献身的な努力が、今日の沖縄研究の基礎をつくり、前途を切り開いていったといっても決して過言ではない。

その仕事は、言語・文学・歴史・民俗など多方面にわたり、一生の間に残した著書は二十冊余、論文は三百点余に及ぶ。中でも『おもろさうし』を中心にした研究は、沖縄文化の根源をあますところなく包みこんで、豊富かつ多彩である。後の世の人が伊波の顕彰碑に「おもろと沖縄学の父」と刻みこんだのも、けだし適切であろう。

伊波普猷は、従来沖縄研究の師父として讃仰されてきたが、最近は近代沖縄史の原点に立つ思想家、あるいは「沖縄学」ということばそのものを表現した全人格的な存在としても問い直されるようになってきた。伊波普猷の学問の全容を明らかにするだけでなく、そういう思想的意味を問うためにも、今日、その業績のすべてを全集にまとめる意義は大きいといわねばならない。

本全集には、新聞・雑誌に発表されたまま埋もれていた論文や随筆はもちろん、在来の著書論文目録から洩れていたものも加えるなど、可能な限りの努力を尽くし、伊波普猷の学問的業績のすべてを明らかにすることにつとめた。

本全集十巻が、今後の沖縄学のいっそうの発展に貢献することができれば幸いである。

一九七四年二月　**平凡社**

監修者のことば

伊波普猷は、沖縄の古典『おもろさうし』の研究に生涯精力的に取組んだ言語学者であり、歴史学者・民俗学者であり、また思想家・啓蒙家でもあった。

詩人肌で情熱に燃え、その想は生涯つきることなく泉のように湧いた。沖縄を心から愛するが故に更に深く沖縄を知ろうと努め、その眼は瞬時も沖縄を離れず、遠く沖縄の将来を慮った偉大な郷土人であった。伊波ほど沖縄人に多大の感化を及ぼし、かつ敬仰された学者はない。

論著三百数十篇、未開拓の分野に挑んだ独創的な述作に富み、言語・文学・歴史・考古・社会・民俗・宗教・芸能等広範囲に亙って広く深く、また創見・卓見に満ちている。その凡ては沖縄への愛情で貫かれ、彼の人格の中で脈絡・体系を成し、渾然として彼の目指した沖縄学の全容を浮彫りにしている。

併しながら、彼の生涯は必ずしも平坦でなかった。殊に大正末期以降の東京時代は一貫して清貧に甘んじ、更に戦時中の長年の苦しみを人々と共に耐え、遂に爆撃により住居が全焼した。そして、最後の著書『沖縄歴史物語』を書き終えた一ヵ月後の昭和二十二年八月、敗戦苦の中に世を去った。その学問的成果の多くは、このような苦境の中に生まれたのである。また、彼は学問に誠実である一方、明朗闊達、極めて魅力的な人柄であったが、それが全著作に亙って滲み出て、一つの基調をなしている。

さて翻って、今日沖縄学は日に日に隆盛に向かい、その研究は各専門分野に細分されて深まりつつあるが、一面隣接諸科学の綜合的連携の必要も痛感されつつある。この時にあたり、伊波の全著作を貫く綜合的な観点は、現在の諸学者にとっても貴い指針となろう。既に大部分が入手しがたいものとなった彼の論著を集大成したこの全集が、今後も沖縄学の一大礎石となり、延いては日本文化の本質と歴史の研究の進展に大きく貢献することを信じて、これを世に送ろうとするものである。

服部四郎　仲宗根政善　外間守善

伊波普猷全集を推す

伊波先生の業績

●沖縄歴史研究会会長
宮里 栄輝

伊波普猷先生は、明治三十九年東大の言語学科卒業後四十年間、死の直前まで、ひとすじに沖縄研究に没頭され、オモロの校訂本をはじめとして幾多の著書論文を残された。

所謂沖縄学の父として、その業績は高く評価される。先生の研究成果をふまえ、戦後多くの若い学徒が輩出して、沖縄研究は大きく前進した。沖縄は未曽有の戦禍によって、焦土と化したが、その歴史や文化は、再認識され、再評価され、やがて、民族解放に通ずる歴史の証しが解明されようとしている。

伊波先生は、彼の最後の著作『沖縄歴史物語』の末尾で、地球上で帝国主義が終りを告げる時、沖縄人は「にが世」から解放されて「あま世」を楽しみ、十分にその個性を生かして、世界の文化に貢献することが出来る、と書き留めている。ここで先生が何をいいたかったのか、かならずしも明確ではないが、社会の発展によって、沖縄が到着すべき終着駅を示唆しているように思われる。

伊波先生が、生涯をかけて書きつづけた数多い著述や論文・随筆の中で、単行本として、又は選集として出版されたものは別として、新聞や雑誌に発表されたものは、今日殆どわれわれの目に触れる機会がない。このたび、平凡社が、これらの論文・随筆を網羅して、『伊波普猷全集』を出版せんとする企画を多謝するとともに、沖縄の歴史や民俗に関心をもつ人々の必読をおすすめしたい。

南倭の先覚者

●法政大学総長
●沖縄文化研究所所長
中村 哲

馬琴は中国の史書が古くから大和の倭に対して、沖縄を南倭として取扱い、時に、その記述が混同されていると述べている。日本史の記述が沖縄の固有の発達史を含んで取扱われねばならないことを、すでに人々は気付き始めている。日本文化は沖縄において南方との接触点を見出しつつ、海の国としての倭の縮図をここにみる。この南倭の史実を究め、みずから倭との共通の精神を表明しているのが、沖縄研究の父、伊波普猷である。固有の日本文化の発掘者として柳田国男、折口信夫と並んで伊波の不朽の功績をたたえねばならないが、この三者に共通していえることは、博学のうちに、学問的対象に対する温かな愛情があり、豊かな感受性があって、いわば学問のなかに詩精神を含んでいることである。民俗文化の追求にもレヴィ＝ストロースのように、数学的思惟が加味される今日であるから、文人的学問はかつての大時代の学風を示すものかもしれぬ。しかし、伊波の学問の特徴は柳田、折口と違って社会学者としての科学的思考が基礎にあり、現代科学と直結することである。一個の先覚的学者として、思想家として、日本思想史に確乎たる地位を刻し、いく久しく多くの人々の愛読に耐え、幾多の問題提起をしてくれるのは、伊波の現代的意味であって、歿後二十七年、そのことを証明するかのように、いま、ここに彼の全労作が再現するというのは、よろこばしい。

沖縄の人文学者

●作家
大江健三郎

沖縄学の専門家、専門学徒にとっては、伊波普猷の偉大さはあまりにも明らかであろう。われわれ一般の人間にとって、伊波普猷の著作は、読んで興味深く、有効か？　僕は、それがいかにも高度に興味深く、深く有効だと思う。

ルネサンスの人文学者がそうであるように、ある学問の世界の創始者である巨人は、その仕事に全人的なひろがりとまとまりを、くっきり浮かびあがらせているものである。沖縄学の創始者たる巨人伊波普猷も、そのいかにも小さな文章にすら、かれの綜合的な全人性をあらわしている。

伊波普猷における全人性とはなにか？　それは沖縄にはじめておこった中学ストライキの犠牲となって「他日政治家になって、侮辱された同胞の為に奮闘する決心」をかため、学問を志して東京遊学した人間の全人性である。日本ファシズムの嵐に、沖縄図書館にこもりつつ、沖縄の民衆の歴史的な被差別の状況、なおもかさなる現実の苛酷に、静かに重く告発の言葉を発しつづけた人間の全人性である。

しかも沖縄の独自の文化伝統にたつ、穏やかな威厳を微光のようにただよわせた全人性である。それらはすべて今日のわれわれに、沖縄とは、日本人とは、と問いかけるための、もっとも本質的な契機そのものをなしている。

伊波普猷全集 全10巻 主要内容

第1巻

古琉球（琉球人の祖先に就いて　琉球史の趨勢　阿麻和利考　官生騒動に就いて　三鳥問答　琉球の口承文芸　民謡に現はれたる八重山の開拓　P音考　琉球語の掛結に就いて　混効験集　他）**古琉球の政治　歴史論考**（「首里」の語源は結局わからない　琉球史の瞥見）

第2巻

南島史考　孤島苦の琉球史　沖縄歴史物語　歴史論考（隋書に現れたる琉球「隋書の琉球」補遺　他）

第3巻

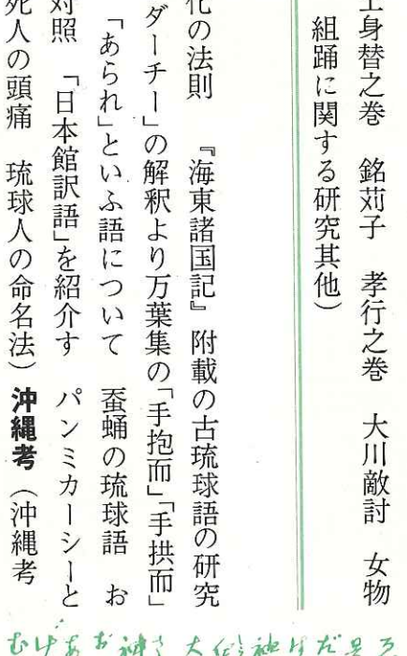
琉球戯曲集（護佐丸敵討　執心鐘入　忠士身替之巻　銘苅子　孝行之巻　大川敵討　女物狂　手水之縁　花売之縁　万歳敵討　他　組踊に関する研究其他）

第4巻

南島方言史攷（琉球語の母音組織と口蓋化の法則　『海東諸国記』附載の古琉球語の研究　琉球語彙　フカダチ考　琉球語の「トーダーチー」の解釈より万葉集の「手抱而」「手拱而」の訓へ　「あさみち」といふ古語に就いて　「あられ」といふ語について　蚕蛹の琉球語　おやだいり考　琉球語と壱岐方言との比較対照　「日本館訳語」を紹介す　パンミカーシーとチャンクルー　那覇の読み方　東風と死人の頭痛　琉球人の命名法）**沖縄考**（沖縄考運天の古形を辿る　馬場の琉球語　仲村渠考　庫裡について　庫下最古の用例をめぐつて）

第5巻

をなり神の島（をなり神　南島古代の葬制　朝鮮人の漂流記に現れた十五世紀末の南島　かざなおり考　生長する石　八重山のマクタ遊び　つきしろ考　南島の稲作行事につきて　南島の稲作行事について　影薄き国つ神　あまみや考）**日本文化の南漸**（火の神考　君真物の来訪　庫下最古の用例をめぐつて）



ざなおり考　生長する石　八重山のマクタ遊び　つきしろ考　南島の稲作行事につきて他）　**日本文化の南漸**（火の神考　君真物の来訪　影薄き国つ神　あまみや考）

第6巻

おもろ選釈　校訂おもろさうし（序　あとがき）　**おもろ覚書　おもろ論考**（おもろ研究の草分けとおもろ草紙の異本　おもろ神のみせゝる　尚寧王妃のおもろ　媾曳を歌ったおもろ　おもろ落穂集　古代国語助詞「い」の用法の瞥見　尚巴志の勃興の琉球の創世紀と祭祀に及ぼせる影響　中世に於ける沖縄と道之島との交渉　他）

第7巻

琉球の五偉人（三偉人と其背景）　**琉球人種論　沖縄女性史**（古琉球に於ける女子の位地　尾類の歴史）　**琉球古今記**（孤島苦の琉球　琉球史上に於ける武力と魔術との考察　猿田彦神の意義を発見するまで　古琉球の歌謡に就きて　祭式舞踊（おもりくわいにや）『渡琉日記』を紹介す　琉球語の母韻統計　他　附録　中学時代の思出）

第8巻

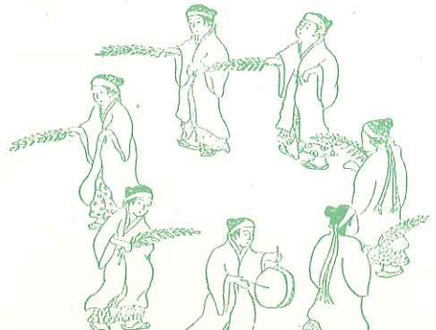
琉球戯曲辞典　琉球語便覧（沖縄対話　チャンバレーン氏増訂会話ト短イ話）　**言語論考**（島ちやび考　声音学大意　琉球語概観　子安貝の琉球語を中心として　万葉語と琉球語　有気音と無気音に就いて　尚真王の神号「おぎやかもい」の意義　琉球の方言　他）

第9巻

文学論考（組踊の独自性について　琉球国劇の発生　琉球古謡「おほんしやり節」の研究　日本文学の傍系としての琉球文学　琉球の祭式舞踊に就いて　他）　**民俗論考**（浄土真宗沖縄開教前史　火の神の成長した過程並に鼠の出自に関する伝承其他　ユタの歴史的由来　南島の黥　古琉球の「ひき制度」に就いて　南島稲作行事採集談　他）

第10巻

雑纂（両属化の琉球　海の沖縄人　喜安日記　食呉ゆす者ど我が御主の真意義　独逸に於ける唯一の南島研究家　沖縄の代表的政治家　沖縄の殉死に就いて　球陽雑話　アカインコ考　アカインコ続考　古琉球の文献　南山王の朝鮮亡命　他）　**年譜　索引**



伊波普猷略年譜

明治九年（一八七六）
二月二〇日、那覇市に生まれる。
明治一九年（一八八六）一〇歳
沖縄師範学校付属小学校に入学。
明治二四年（一八九一）一五歳
沖縄中学校に入学。照屋宏（那覇市長）、真境名安興（沖縄研究者）らと同学。
明治二八年（一八九五）一九歳
教頭・教諭の免職問題で前年来の校長との対立が再燃、校長排斥ストライキを推進、退学。
明治三三年（一九〇〇）二四歳
第三高等学校に入学。
明治三六年（一九〇三）二七歳
東京帝国大学文科に入学。言語学を専攻、琉球語を研究する。同学に橋本進吉、小倉進平、一年後に金田一京助あり、親交す。
中学時代の教師田島利三郎より「おもろさうし」の資料を譲られ、おもろ研究に着手。
明治三九年（一九〇六）三〇歳
大学卒業、沖縄へ帰る。
言語・民俗資料の収集、古老の談話採録を行ない、真境名安興と協力、琉球史研究に従事。
明治四〇年（一九〇七）三一歳
沖縄教育会主催講演会で「郷土史に対する卑見」と題して講演、従来の偏見を訂し、琉球人種論に及ぶ。
明治四三年（一九一〇）三四歳
沖縄県立図書館館長嘱託となり、開館に尽力。
明治四四年（一九一一）三五歳
『古琉球』『琉球史の趨勢』『琉球人種論』刊行。
沖縄県立図書館開館。
大正二年（一九一三）三七歳
少年雑誌「おきなは」の顧問となり、「私の子供の時分」を連載。
大正四年（一九一五）三九歳
重患に罹り療養。病後、比嘉春潮とエスペラントを学ぶ。
大正五年（一九一六）四〇歳
真境名安興との共著『琉球の五偉人』を刊行。
大正八年（一九一九）四三歳
「血液と文化の負債」と題する民族衛生講演を各地で方言で行なう。一四年上京するまで三六〇回余に及ぶ。
真境名安興との共著『沖縄女性史』刊行。
大正一〇年（一九二一）四五歳
沖之永良部島に講演旅行。与論島などで文献収集、古老の談話採集。
柳田国男来島、「おもろさうし」研究の完成を慫慂され、再び校訂を始める。以後柳田と親交す。沖縄県立図書館館長に就任。
大正一一年（一九二二）四六歳
『古琉球の政治』刊行。
大正一二年（一九二三）四七歳
折口信夫来島、以来親交す。
大正一三年（一九二四）四八歳
『校訂おもろさうし』を携えて上京。柳田国男、折口信夫を訪問。県立図書館館長を辞職。『おもろ選釈』刊行。柳田国男『おもろさうし』刊行のため尽力。
大正一四年（一九二五）四九歳
居を東京小石川に移す。『校訂おもろさうし』（三冊）刊行。伊波普猷激励会開かれ、金田一京助、安藤正純、橋本進吉、折口信夫、松本信広、中山太郎、岡村千秋ら参会。
大正一五年（一九二六）五〇歳
『浄土真宗沖縄開教前史』『孤島苦の琉球史』『琉球古今記』刊行。
昭和二年（一九二七）五一歳
帝国女子専門学校講師となり言語学を講ず。
昭和三年（一九二八）五二歳
千代田女子専門学校講師となり言語学を講ず。在留沖縄県人に招かれハワイで琉球史を講演。ついでアメリカに遊び、翌年二月帰朝。『沖縄よ何処へ』刊行。
昭和四年（一九二九）五三歳
『校註琉球戯曲集』刊行。
昭和五年（一九三〇）五四歳
帝国学士院の補助の下に『琉球語大辞典』の編纂に従事。
昭和六年（一九三一）五五歳
大島郡教育会編により『南島史考』刊行。
昭和九年（一九三四）五八歳
『南島方言史攷』刊行。
昭和一〇年（一九三五）五九歳
国学院大学学生他有志に「おもろさうし」を講義、約半年間。『琉球史料叢書』中の「琉球国由来記」解題を担当。琉球祝詞集成編纂を志す。
昭和一一年（一九三六）六〇歳
県人有志による還暦祝賀会、郷里と東京で開かれる。第二回日本民俗学講習会はその一日を伊波還暦記念日にあて琉球座談会を開く。在京県人有志により還暦記念の南島文化研究会創設され、毎月一回「おもろさうし」を中心に琉球文学を講ず。
昭和一三年（一九三八）六二歳
『をなり神の島』『琉球戯曲辞典』刊行。
昭和一四年（一九三九）六三歳
『日本文化の南漸』刊行。
昭和一六年（一九四一）六五歳
「日本祭祀の傍系なる琉球祭祀の史的考察」の研究に着手。太平洋戦争起こる。
昭和一七年（一九四二）六六歳
『沖縄考』刊行。
昭和二〇年（一九四五）六九歳
米軍沖縄本島に上陸。
東京で戦災を受け、比嘉春潮方に寄寓。
昭和二二年（一九四七）七一歳
八月一三日、脳溢血のため死去。
『沖縄歴史物語』刊行。
昭和三六年（一九六一）
伊波普猷顕彰会、浦添城趾に墓と顕彰碑を建立。
『伊波普猷選集』刊行（～昭和三七）。
昭和四八年（一九七三）
沖縄タイムス社、伊波普猷の業績顕彰と沖縄学発展のため伊波普猷賞を創設。
昭和四九年（一九七四）
第一回伊波普猷賞、宮城文『八重山生活誌』。